

S01-4 小児用の経口製剤：Acceptability and palatability

○小嶋 純^{1,2,3}

¹医療健康資源開発研, ²聖路加国際病院周術期セ, ³日本大医脳神経外科

子どもはたいていの場合、好みに合わない薬であれば飲むことを拒むものである。しかし、薬を服用しなければ治療が困難となり最悪の場合、生命に関わる事態を招きかねない。また、経口製剤の使用が出来ない場合、注射による治療が必要となり、多くのストレスを子どもに、さらには介護者に与える結果となる。乳幼児における経口製剤としては、錠剤等の固形製剤よりもシロップ剤や懸濁剤といった液剤が一般的であろう。しかしながら、液剤には溶解性、味、携帯性および保存条件等の種々の問題点があげられる。近年、WHO では幼児に対して経口固形製剤を処方することが好ましいとしている。液剤に変わる製剤として、幼児に服薬させることのできる新しいタイプの経口固形製剤、小さい錠剤（ミニタブレット）が提案されている。しかしながら、本剤形が「好みに合う薬」であるか否かの情報は乏しい。海外では「好み」を考えるために、Palatability（嗜好性）として製剤設計の際に考慮すべきポイントをまとめている。許容性または受入性と訳される Acceptability と味やフレーバーだけでなく、薬を服用した際の舌触りや喉越しなどの Palatability を踏まえて、求められている小児用の経口製剤「好みに合う薬」について考える。